

【第41回～第50回 まで】

【第50回研究会】 [(2015(平成27)年6月20日(土))] 発表者： 浜崎 順子 氏

〔自主研究発表〕 テーマ：「佐伯年詩雄著『現代スポーツを読む』

スポーツ論の探究現代社会と痩身症候群—身体の消費文化的編成」について

〈要 旨〉

「痩身」をテキストにして、現代社会における身体の有り様を分析し、その問題性を考えることはきわめて正当なことであり、むしろ「痩身症候群」に示されるこの身体の時代を読み解くことは我々の緊急の課題である。痩身は幻想であり、標準化による身体の物象化と自己疎外といえる。

〈所 感〉

テレビでもよく、痩せるためとか、健康のためとか、美しくなるための効果があるという飲み物や運動器具のコマーシャルが目につく。食物を選び、サプリメントを飲み、ジム、水泳、フラダンス、ヨガ、加圧トレーニングなどに通っている人々にも痩せたい、美しくなりたい、健康で長生きしたいといった気持がある。このような痩身願望は、自分の欲求と同時に社会的に評価されたいという欲求が強いと思う。国によっては価値観が違う時もあり、韓国では男性ではスリムよりマッチョな身体を求めていると聞く。身体も顔も身体の整形が当たり前のようだ。オーストラリアでは太っていることがいいようだ。

〈論 点〉

- ・ 細い人が美しいという日本人の想いはどこから来るのか。商業主義に踊らされているようだ。
- ・ 健康で長生きしたい、美しく若く見られたいという思いは多くの人にあると思う。痩身の問題を把握しながら、私達はどう生きればよいか。

〈話し合い〉

- ・ 美の基準は時代でも違う。高松塚の婦人像や奈良天平の仏を見ても下膨れのふっくらした顔だ。栄養の不足した時代ではそうした顔立ちが理想だったのだろう。
 - ・ 竹下夢二の絵を見ると、病的とも思えるほどやせた女が描かれており、人気があった。
 - ・ 美を求めるのは、真善美を求める人間ならではの欲求で、それ自体は問題ではないが、行き過ぎるのがよくない。一定の美人に同調した、無個性の顔になっている。
 - ・ あまりの痩せすぎは健康上大きな問題で、出産もできなくなる。現在、少子化が問題になっており、高齢出産もあるが、若い時の痩身がもとで不妊になっている人もいる。
 - ・ 人間として、バランスのとれた人格が望ましい。外形ばかり整えて、社会的常識を欠いているばかりか、政治問題や社会問題に対してさえ、ひとかどの意見でも一つ言えないようでは魅力がない。内面の充実を忘れてはいけない。
 - ・ 一般教養もあり、品格の滲み出たところに美しさがある。優しさ、親切、おもてなし、謙虚さ、誠実、思いやり、気配り等々、他の人がはっと美しさを感じ取る要素がある。
 - ・ お顔の化粧も大切だが、心の化粧は年齢に関係なくもっと大切だ。
-

【第49研究会】 [(2015(平成27)年5月23日(土))] 発表者： 山野 晃 氏

テキスト：上田吉一著『精神的に健康な人間』川島書店 1969

第1章 精神的に健康な人格の概念 第3節 健康な人間の定義 (p.30～35)

フロム・オルポート・ロジャーズ・マズロー・フランクルによる概念

〈要約〉

- (1) フロム 「精神の健康を人間が人間性の本質と法則に従って十分に成熟すれ得られるもので社会構造がこのような自由の表現を歪めるところに病気が生じると考える。生産的構え。」
- (2) オルポート 「成熟した人格である。個人が外界(内面世界をも含めて)に対してどのような精神的態度をとるか。6つの特性がある。」
- (3) ロジャーズ 「カウンセリングの目標とする健康な人格『完全に(十分に)機能する人間』である。存在の状態ではなく過程であり、到達点ではなく方向である。主な特徴として5つ。」
- (4) マズロー 「自己実現の人間である。15の特徴がある。」
- (5) フランクル 「自由な意思と決断をもって苦悩に耐えながら人生を切り拓いてゆく人間で、10の特徴がある。」

〈発表者からの問題提起〉

精神的健康性に関わるキーワードは次のように見出される。

あるがまま・生産的・可能性の実現、善は生に寄与・より広い視野・自我拡大・他者との温かい関係・生きることそのもの・寛容的で共感的な思いやりの温かさ・目的目標・自己客観視・人生を統一する人生哲学・実存的な生き方・純粹の自己になること・自由・自分の責任義務・責務使命・創造性・現実の正確な認知・素直・自発的・主体的・自然な・自律的・能動的・新鮮・純粹純真・畏敬喜び驚喜の感覚・共感と愛情・意味・価値・信頼・倫理的道德的基準・創造性独創性・ユーモア・苦悩に耐えながら・人生を切り拓いてゆく人間・希望・無欲無心・没頭集中・生きる意欲や目的追求・意志・調和・共働(同)・与える愛・慈悲の心、…… (追加 マズローの考えるキーワード：真・善・美 躍動 個性 完全 必然 完成 正義 秩序 単純 豊富 楽しみ 無礙 自己充実 意味

『マズローの心理学』 フランク・ゴープル(著) 小口忠彦(監訳) 産業能率大学出版部 1972 p.83 より)

〈問題提起〉

- (1) キーワードにあるような心をもった人間が精神的に健康な人間なのだろうが、人間としての本性・奥底にあるのに加えてパーソナリティ・志向性・態度などを育てる環境や教育を考えねばならないのでは。
- (2) 「あるがまま」というのは、自然体で純真というニュアンスを含んだ用語と考えるが、生徒に「あるがまま」の話をすると「現状のままでよい」「楽な方を選ぶ」と自分にとって都合のよいように解釈しがちである。ロジャーズは「自己実現はそれが困難で同時に苦悩を伴う過程である」「それは人生の流れに完全に身を投ずることを意味する」などと述べている。いわゆる生徒達の受け取りは本来のものではないと思うが、カウンセリングでいう「あるがまま」はどのような状態であると説明すればいいのか。

〈話し合い〉

- △ キーワードにあるような特性は、学校でも道徳・その他様々な教育の機会を通して試みられている。大切な教育課題だが、教科の指導に時間をとられがちなので、全人的な教育方法をより重視しなければならない。
 - △ マスローの欲求段階説によって、一人一人がどの欲求での不満足状況かを把握する必要性が示唆される。
 - △ フロムの『自由からの逃走』を読むと主体性の大切さを痛感する。先日主体性の欠けた人達の会があった。その人達は自分では気づかず、知らず知らずに同調してしまったものだ。これは有名なアッシュの実験（同調性の実験）で実証されており、人間心理の実態をよく表している。世界一理性的なドイツ人が自ら自由を捨ててヒットラーの権力になびいたのも同じではないか。フロムは社会科学的な教養を駆使してファシズムの心理を解明した。
-
-

【第48研究会】 [(2015(平成27)年4月11日(土))] 発表者：森 光巧悟 氏

テキスト：上田吉一著『精神的に健康な人間』川島書店 1969

第1章 精神的に健康な人格の概念 第1節 新しい人間価値の追求について (p.25 ~ 30)

〈要約〉

健康な人間の選ぶ好みや判断のみが究極的に人類にとっていかなるものがよいかを示している。人間価値をとらえる新しい倫理は、まずこの「よい選択者」を徹底的に研究するところから始めなければならない。その研究の方法として、臨床的方法が、人間のあるべき健康像をとらえるもっとも有効な方法ではないか。次の人達は、人間に関する豊かな学識を基礎に心血を注いで子供を観察し、治癒していく過程ではじめて高度に科学的な人間観を獲得した。

たとえば、フロイトは、快楽原理のみに支配された小児性を脱却し、不安やおそれあおもたない成熟した人格がそれだといい、アドラーは優越感と社感情が調和的にはたらく人格だといい、ホルネイ（カレン・ホーナイ）は、自己の真の感情や意志を身をもって体験し、かれ自身の行為についてこれをうけいれる責任がとれる人格だという。

〈発表者からの問題提起〉

1. よい選択者が、ときの行政の場合、落とし穴があるような気がする。選択の基準が問題。
2. 牛乳の品質基準から自然淘汰、自然選択、適者生存の問題。
3. 「アドラーの考えは「自尊感情」につながるか。

〈話し合い〉

- ◇ 日本の子供たちが、諸外国に比べて、自尊感情が低いということは、常にいわれている。これには教育の在り方が影響していると思う。低学年のときから、テストテストで「あなたはできていない、できていない」といったマイナスの評価の繰り返しが続けば、誰だって次第に自信を失っていく。自分の良さ、セールスポイントに気付かせる教育が必要だ。
- ◇ 自国に誇りを持つ割合も低い。自虐史観に基づく教育の結果だ。一方では、過度に民族の優越性を誇示したヒットラーも問題だが。

- ▽ 褒めることが大切だ。このことで、ある死刑囚ですでに執行されたが、その人は、中学生のとき、美術の先生から「君の絵は下手くそだが、構図がよい」とほめられたことがある。これはかれが生涯で唯一のほめられ体験だった。これが機縁でその先生の奥様に短歌を学ぶ機会を得、すばらしい作品を生むまでになり、真人間として死飛台にのぼった。
- ▽ 高校のとき、教育学部を受けます、と担任の先生に言ったところ、「君ならいい先生に」といわれ、このことが生涯の励みになった。教師の一言が大きく影響する。
- ▽ 反対に、自分の不用意な一言が子供を傷つけていることも十分考えられる。
- ▽ ホーナイスは、真の自己 (real self) を言った。これを伸ばすことで自己実現を図ることの大切さを言ったが、誰も内部に「真の自己」を持っている。ある不登校の高校生だが、その生徒は芸術方面で生きたい希望をもっていたが、東大出で、銀行勤めのエリートの父親が自分と同じ道を歩ませようと無理をした。そのため不登校になった。父親は深く反省をして自らの生き方を改め、それによって息子の不登校はおさまった。この例で分かるように、内部にある「真の自己」が世間体などで覆いかくされ、十分発揮できないことがある。
- ▼ フロイトは「成熟」を言った。新聞をみてもいろんな分野で「成熟」の言葉が使われている。曰く「日米の成熟した関係」「成熟した日韓関係の構築戸イギリスにみる成熟した民主主義」等々。おそらく、少しの意見の対立でギスギスしたり、動揺することのない、大人としての、おおらかな対処のしかたの関係をいうのだろう。臨床家から、いろいろ示唆されることが多い。
-
-

【第47研究会】 [(2015(平成27)年3月7日(土))] 発表者： 山野 晃 氏

テキスト：上田吉一著『精神的に健康な人間』川島書店 1969

第1章 精神的に健康な人格の概念 第1節 新しい人間価値の追求について (p.20 ~ 25)

〈要約〉一真の人間価値がとらえられるかどうか

1. 統計的方法の問題点

- (1) 評価の基準が一面的であって、複雑で多面的な人格の要因をすべて網羅することはできない。
- (2) 人格特性群がすべて同じウエイトを持っているかどうか。

統計的方法に代わり、登場するのが臨床的方法。人間のもつ法則を発見し、本質的価値を洞察した偉大な人間学者は、たいてい臨床家から出ている。

2. 臨床的方法の利点

- ア. 臨床家の扱う異常性は正常な人格の誇張であり、倒錯である。
- イ. 個人の徹底的分析と総合的理解を通して人間の本質をとらえようとする
- ウ. 個人の縦断的考察を通じて人格独自の姿のまま理解することができる。
- エ. 人間の内面生活に入っていく。

以上、決して統計的方法を否定するものではない。ただ、臨床的方法が人間存在の本質にせまることができる点ではるかに有利である。

〈話し合い〉

▽ 前回も話したが、統計は経済学部の学生には、大数処理で市場分析を行い、商品の売れ筋を把握するには必須と思われるが、個の理解、育成を旨とする教育学部学生には、不必要とは言わないが、もっと実践的、臨床教育学的な知識、技能の習得が不可欠と思われる。こういえば、以前の師範教育が想起されそ

うだが、これでは、はば広い教養を身につけた教師養成を目指して設置された教育学部の存在意義がない。臨床の方法は、確かに人間の内面理解には有利に違いないが、卒業論文作成という時間の限られたなかでは、臨床経験の不足、資料収集の困難性から、客観的な論証にたえるだけの論文作成は期待できない。精緻な統計分析に精力を費やした学生時代とその直後に体験する教育現場との乖離は大きく、よくもまあ、定年まで勤め得たものだと思う。統計に頼らずとしても、単なる青年の主張に留まってはならない。低くてもよい。まだ誰も登っていない山の頂上を目指すところに学生論文の価値がある。未踏峰かどうかはプロである教官がよく知っている。教育学部学生の論文作成には、テーマやアプローチの方法に対する指導教官の指導がより大切だと思われるが、残念ながら教官には現場体験のないアカデミックな人が普通である。最近では、現場経験をもった大学教官が増えてきているのは喜ばしい。

▽ 最近多発する凶悪な少年犯罪をどう考えればよいか。認知の問題と捉えられるのか。刑事責任を問えるほどに成熟していない少年もいる。

▽ この後、河野氏の自主研究発表がありました。2015年1月25日NHKスペシャルネクストワールド「私達の未来」をもとにし、河野氏は、人間の未来は人工知能と上手に付き合い、これを駆使することにより、究極の自己実現、つまり圧倒的な知能をもつ「完全に機能する人間」「完全なる人間」を目指すようになるのか。科学技術を活用した自己実現は、新しい人間観の萌芽なのか、と問いました。

【第46回研究会】 [(2015(平成27)年2月7日(土)) 発表者：中川 昌信 氏

テキスト：上田吉一著『精神的に健康な人間』川島書店 1969

第1章 精神的に健康な人格の概念 第1節 新しい人間価値の追求について (p.14 ~ 20)

〈要 約〉

人間の身体機能には一定の生理的法則がある。精神機能も同じで、環境に適応する叡智を含むという法則がある。この法則に従うことで人間は精神的・肉体的生命を維持増進している。この法則に沿って完全に生きれば最も高い価値を実現できる。この反対は不幸。例：肉親や友人の成功を我がことのように喜ぶ。人間一般の心理法則に適う＝倫理的行為。我々は自らの行為の規範を知るためにも、人間にはたらく法則をとらえることからはじめよう。人間の本性にはたらく心理学的・生理学的諸条件の解明、人間の持つ複雑な機構の分析や人間内の条件と結果の相互関連精神分析学におけるリビドーの変遷、心的機制の概念、形態心理学——レヴィンの力学概念、ゴールドシュタインの全体性心理学、アドラー、フロム、ホルネイ、オルポート、マズロー、ロジャーズ等の人格論に人間性に関する豊かな説明がある。遺伝学、生理学、生物学、人類学、社会学から広い意味の人間学的知識が得られる。人間法則の全体的理解のうちに人間の生きるべき道、目指す方向は明らかだ。個人のもつ心理学的事実を具体的・科学的とらえる努力——我々の基本的課題だ。人間の本性（本性）的理解により、人間の「ありのままの姿」が浮かび上がる。ありのままの人間存在のなかに生きている真理の解明——「あるべき人間像」事実や法則こそ規範、徳という立場をとる。事実と価値を切り離した場合、規範が優先した場合——強制されて奴隷の道徳、狭い精神主義規範を無視した場合——倫理性を喪失したアナーキズム人間のありのままの姿、天真爛漫とした人間性の発露を高く評価する。新しい規範は強制力を持たない。

以上、人間の価値を発見するためには、人間のうちにはたらく法則——普遍的な特性をとらえることを論じてきた。人間の法則をとらえる有力な方法の一つが統計。統計的方法は、現在、正常異常を識別する最も簡便で便利な方法として考えられている。

〈担当者話題提起〉

教育心理学科にいたので、岡本教授からは人格論を学んだ。上田先生はこの流れ。高橋教授から臨床心理学を学んだ。知能テストの作成、鈴木ビネー、ロールシャッハ、バウムテスト、クレペリンテスト、等現間隔法等の測定、教育統計学を学んだ。卒論は因子分析的研究。

〈話し合い〉

☆ 上田先生が、博士論文を書かれた時代の社会の混迷状況はこの書の意図と深い関係がある。昭和40年代、日本が高度経済成長を続ける一方で、東大入試中止に見られるように学園紛争が相次ぐ中、政府からの教育の是正、期待される人間像の発案など、道徳教育を巡る右よりの動きがあった。上からの、特に終戦以前の修身教育に見られるような徳の押しつけは、心理学者の上田先生には耐え難いものがあっただろう。あくまで人間のうちにある法則が新しい規範であるとの姿勢が、強く打ち出されている。

☆ 因子分析は、緻密な数学的処理を経て、一見科学的に見えるが、多くの問題点を含んでいる。

☆ 教育は個との対話が原則である。大数処理では個が埋没する。事例研究は大事な方法論だ。

【第45回研究会】 [(2015(平成27)年1月24日(土))] 発表者： **山野 晃** 氏

テキスト：上田吉一著『精神的に健康な人間』川島書店 1969

第1章 精神的に健康な人格の概念 第1節 新しい人間価値の追求について (p.1～14)

〈著書の要約〉

- (1) 人間が本来もつところの法則を知り、これに従って生きることによって、はじめて人間は完全な発達と成熟に到達しうるものである。
- (2) 問題児判定にみられる相違から、人間理解には2つの立場がある。
 - ア)人間性を既成の規範から評価しようとするもの
 - イ)人間性の十全な発達ないし健康性の観点からとらえるもの今日みられる文化相対主義と道徳的アナーキズムの時代には、ア)の立場では行き詰まりに達している。今後の人間を導く新しい規範はイ)の立場で、人間科学の法則を知り、その意味で普遍性をもつ健康価値に因らねばならない。

〈山野氏の問題提起〉

- (1) 社会的規範の受容・社会性の発達と精神的健康性(個人の全体像)の両面から人格の評価が重要であるということは納得できたが、社会的規範のもつ社会的・時代的・文化的相違という点が払拭できていないように思う。これを乗り越えるべきではないか。
- (2) 「人格の全体像をみて判断すべき」は賛同できる。では以前考えあたにくつかの健康性に相当するとした特性をもつ人を想定したことがあるが、それは誤りか。その人の核となる人物像を把握して初めて精神的に健康な人といえるだろう。
- (3) テロ事件が頻発している。宗教的・歴史的基準を超えた人間性の根底にある科学的法則性に基づく基準を訴えることが、我々の考えている精神的健康性なのではないか。

〈話し合い〉

- ▽ 現在教職にある人は、以前に比べてかなり心理を勉強している。心理家は子どもの心を理解するのが主であるが、教師はその上に指導が入る。人間観は同じだが、役割が違う。
- ▽ 社会的規範と個人の問題は、楕円における2焦点思考からも考えられる。楕円(長円)には2つの焦点がある。それによってはじめて楕円が成立する。円のように一つの焦点をもつものではない。
- ▽ 社会的・文化的相違の払拭は容易ではないが、現在ユネスコを中心に文化的相違を乗り越える、世界に通底する価値追求の努力がなされていることも事実である。
- ▽ たとえばイスラム諸国と我々とは、文化の相違があるが、これとて、先ほどの楕円の2焦点思考から、お互いの存在を理解し、認め合う共存の態度が必要で、決して円におけるように一つの焦点化を目指すべきではない。寛容さが大事だ。
- ▽ 共存を唱えるときには、寛容と同時に謙虚さも必要だ。内村鑑三は『余はいかにしてキリスト教徒になりしか』でこんなことを言っている。「もし神が右手に知識を持ち、左手に知識を求める意欲を持って、いずれを選ぶかを問うたとすれば、余は左手を選ぶ」。つまり知識は神の領域であり、人間の得る知識は海岸の砂の一粒にすぎない、というのだ。このテキストも科学的知識で健康性を考えるとあるが、科学的知識の限界を考慮する謙虚さが必要だ。
- ▽ 健康性の特性は、今後この書を読み進めていくとき、幾人かの臨床心理家も羅列していくと思う。しかし、いずれも臨床の場では出会った理想的人間像である。日本語では、品性の高い人、品格ある人、人格者なのだから、我々は、少しでもこうした人間に近づきたい、それを楽しみにこの研究会に参加していると思う。

【第44回研究会】 [(2014(平成26)年11月1日(土))] 発表者： 浜崎 順子 氏

テキスト：上田吉一著『精神的に健康な人間』川島書店 1969

「まえがき」の部分

〈要 旨〉

本書においては健康な人間とはいかなる人間を意味するのか。いかなる構造や特性をもち、いかなる行動表現をとるものであるかを問題とし、これらをすでに豊富な知見の積み重ねられている精神医学や臨床心理学などを基礎に究明しようと努めた。

〈要約(要点)〉

- ◇ 近代人は心のよりどころとなるものを真剣に求めているが、万人に納得せられ、その社会に調和と秩序をもたらし得るような普遍的原理は不幸にしてまだ確立されていない。
- ◇ われわれに課せられた課題は可能な限り普遍性と永続性をもち、しかも具体的事実に基づけられた新しい実践的理念を確立することにある。ではこのような新しい道徳基準は何に求められるのだろうか。唯一の基準は「科学」である。
- ◇ 危機の克服と新しいモラルの確立は、自然科学に対応するだけの社会科学、人間の科学に飛躍的な発達によってはじめて可能になると考えなければならない。なかでも人間の科学は人間のうちにはたらく法則を解明し、人間性の尊重を呼び起こすところに、その重要な意義が認められるのである。科学が首尾よく人間の法則をとらえ得たとしても、これがどうして人間の規範や道徳的基準となり得るかという点に率直な質問が提起されるかもしれない。だが、ここでその法則をとらえようとする人間は、本来健康で優れた理想的人間である。

- ◇ 教育や倫理の目標とする理想的人間像を具体的に規定することができれば、万人の準拠すべき行動の規範を確立することも可能になると考えられる。
- ◇ われわれが取り組まなければならない課題は健康と不健康を識別する基準となるべき精神的健康性の概念を科学的に規定することであり、ついでこの基準にしたがって健康な人間の構造や特性をとらえることである。

〈話し合い〉

- ◇ このまえがきを読むと、上田先生の意気ごみを感じられ、楽しく読んでいけそうだ。
- ◇ 人間の法則を科学がとらえたとしても、その法則をとらえるのは本来健康な人間なのだから、このような人間に働く構造的法則を追求することがこの本のねらいなのだ。
- ◇ 確立されていない普遍的な道徳思想とあるが、すでに 50 年を経た今日、ようやく芽が出てきている。本来「普遍」の概念は 18 世紀西欧の啓蒙主義から生まれ、Universal とは一つ uni に向かう verso の意でグローバル化の原理。20 世紀末、市場原理による文化のグローバル化・画一化に対して「多様性」の問題が出現し、最近では、諸文明に通底する価値 transversal value を求める万有相関の世界観が有力。人間本来の能力である理性・感性・霊性の間にバランスを取り戻し、慈悲・アガペーの真の理解を目指す。かけがえのない地球環境の危機を招いた過去を反省し、大いなるいのちの循環への目覚めを促す。

【第43回研究会】 [(2014(平成26)年11月1日(土))] 発表者： **河野 憲一** 氏

〔自主発表〕 「人間はどこへ行くのか」(その2)

岸根卓郎 『宇宙の意思』 東洋経済新報社 1993

同 『見えない世界を超えて ―すべてはひとつになる―』 サンマーク出版 1996
をもとに

前回に引き続き、河野氏の発表を中心に話し合い

〈岸野氏の著作の概要〉

- 21) 共時性とは、 22) 科学の限界と新たな理論、 23) 東洋神秘思想、 24) 宇宙の未来
25) 現代物理学の宇宙観、 26) 科学と宗教、芸術、 27) 未来人類文明

〈おわりに ―河野氏の私見〉

- ① ローレンス・クラウスは著書(ローレンス・クラウス著、青木薫訳『宇宙が始まる前には何があったのか?』文藝春秋、2013)の中で次のように述べている。①反物質の粒子は、物質粒子と打ち消しあい、わずかに過剰だった物質粒子が今日まで残り、目に見える宇宙を作り上げた。物質と反物質のごくわずかな非対称性が打ち立てられたという出来事が宇宙創造の瞬間である。(225頁)
- ② 炭素、窒素、酸素、鉄などの元素は星の中心部にある高温の炉でしか作れない。これらの元素が我々の体内に存在するのは、銀河系の歴史の中ではこれまで 2 億個ほどの星が爆発したと考えられており、多くの星が爆発し、その炉で作った元素を宇宙にばらまき、やがてそれらの元素が、太陽系の中の地球にも集まってきた。(54頁)
- ③ 宇宙の膨張は加速度的に進み、可視光線は波長が伸びて赤外線やマイクロ波や電磁波になり、いず

宇宙は限りなく膨張を続けるとも再び収縮へ向かうともいわれ、未知である。2兆年後にも膨張を続けているとは長いと思われるが、宇宙スケールの時間間隔では決して永遠といえる長さではない。もちろん、そのまえに太陽はこれから50億年ほどで死んでしまうし、地球はそのときには消滅しているであろう。宇宙も私たちの住む宇宙だけ一つではなく、たくさんあるともいわれる。見えている宇宙はごくわずかであり、未知の宇宙の方が広大なのである。ヒンズー教の経典の中では、宇宙の膨張と収縮の1サイクルをカルパといったが、今我々が存在している宇宙は既に何度目かのカルパなのかもしれない。勿論、まだ不明なことの方が多く、科学と宗教とが融合しながら解明していくことが求められるが、物事を非科学的に盲信してもいけないのであり、論理的に、そして深い洞察の中から直観で分かることが大切なのである。

それでも、宇宙と自分とはつながっていることは確かなのである。人間の体内には海と同じ成分の羊水があることから人間が地球と一体であること、つまり宇宙とつながっていることがわかる。「宇宙は私の中にあり、私の中に宇宙がある」といえる。宇宙と部分との関係は、人間のみならず兎や亀や野の花についてもいえる。人間だけが特別な扱いなのではない。宇宙論的視点からは、人間を含む万物の姿は一時的な形態であり、通常は大きな波動エネルギーの流れの一部である。物質としての死後は反物質と一体化し、エネルギーの流れに返っていく。宇宙のエネルギーの総和は不変である。このため、どんな誰のどのような死も、全く無駄ということはない。物質としての波動は消えるが、もう一つの目にみえない側の波動は宇宙の波動の中に返り、続く。自分の肉体は宇宙物質からできており、宇宙の一部であり、その物質も究極には波動エネルギーである。

(紙面の都合上、以下割愛します)

【第42回定例会】 [(2014(平成26)年10月4日(土))] 発表者：河野 憲一 氏

〔自主発表〕 「人間はどこへ行くのか」(その1)

岸根卓郎 『宇宙の意思』 東洋経済新報社 1993

同 『見えない世界を超えて ―すべてはひとつになる―』 サンマーク出版 1996
をもとに

——岸根卓郎氏の論を上記2冊の本から紹介し、現代物理学の理論や東洋神秘思想のなかに回答を求めていきながら、次回(43回例会)で最終的に私見を述べます。

河野氏の疑問は「生とは何か」「死とは何か」「生の前に何があり、死の後に何があるのか」「生命はいつ生まれ、いつ終わるのか」「生死をつかさどるものは何か」という哲学的、根源的なものです。河野氏は言う。「人間を物質としてだけでとらえたのでは、死へ向かっている人間像しかうまれてこない。高齢化社会を迎えた現代人の最大の不幸は、生きるためや死んでいくための哲学がなく、悲しみや虚しさだけが残ることである。人間は死ぬば無になるのか、何もなくてどこへ落ちていくしかないのか、生のみを優先し、死を忌避していけば、人は誰も死ぬのであるから、やがて全員が敗者となる。生の質を高めると同様に死についても、その質を高めることができる哲学、思想、科学理論がないか。村上和男(遺伝子学研究者、元筑波大学教授)は「遺伝子が読み取れるということは、書き込んだモノがいる」ということに気づき、それを something great とした。宇宙創造の設計者である。遺伝子解析や宇宙物理学が進むことで、なぜ生命が生まれたのか、といった人間が生まれてきた意味も解明されるかもしれない。生も死も、意味あるも

のとして、希望をもって最期まで生きるためにもこの問題は最大の関心事である。」

こうして、河野氏は前記岸根氏の著作内容について説明を行いました。

〈著作の概要〉

第1部 万物の根源

- 1) 波動エネルギー, 2) 宇宙の子, 3) DNA, 4) 生命の根源, 5) 生命を吹き込んだのは誰なのか, 6) 宇宙とは, 7) 膨張する宇宙,

第2部 宇宙エネルギー

- 8) 二極対立の宇宙の法則, 9) 周期交代の宇宙法則, 10) 生とは, 死とは, 11) 流れるエネルギー, 12) 宇宙のすべてはエネルギー現象, 13) 社会遺伝, 14) 人類の寿命が尽きるとき, 15) 宇宙の意思, 16) 四次元世界, 17) 見える世界と見えない世界をつなぐ, 18) 「生の芽生え」「生の旅立ち」, 19) 心とは, 20) 人間の心を読み取る植物,

〈著者について〉 ネットによる検索

京都大学教授を経て、現在、京都大学名誉教授、南京経済大学名誉教授、元佛教大学教授、元南京大學客員教授、元 The Global Peace University 名誉教授・理事、文明塾「逍遙楼」塾長。著者の言説は、そのやさしい語り口にもかかわらず独創的、理論的かつ極めて示唆に富む。京都大学では、湯川秀樹、朝永振一郎といったノーベル賞受賞者の師であり、日本数学界の草分けとして知られる数学者、園正造京都帝国大学名誉教授(故人)の最後の弟子として、数学、数理経済学、哲学の薫陶を受ける。既存の学問の枠組みにとらわれることなく、統計学、数理経済学、情報論、文明論、教育論、環境論、森林政策学、食料経済学、国土政策学から、哲学・宗教に至るまで幅広い領域において造詣の極めて深い学際学者である。宇宙の法則に則り東西文明の興亡を論じた『文明論』は、「東洋の時代の到来」を科学的に立証した書物として国際的にも注目を集め、アメリカおよび中国でも翻訳され、中国ではベストセラーとなり、内外でも絶賛され大きな反響を呼んだ。また、著書の『宇宙の意思』は「生」と「死」について、洋の東西における「生死観」の対比を、東洋の神秘思想から西洋科学の量子論に至るまでを視野に入れてひもとくものとして極めて高い評価を得た。本書は、その『宇宙の意思』と前著の『見えない世界を科学する』を、「量子論による心の世界とあの世の解明」の観点からより深化させた姉妹編である。

(データ作成:2014年)

<http://www.php.co.jp/fun/people/person.php?name=%B4%DF%BA%AC%C2%EE%CF%BA>

より引用 (PHP INTERFAVE HOME>お役立ち>人名辞典>岸根卓郎)

※ 次回から上田吉一著『精神的に健康な人間』を読むことになりました。

【第41回定例会】 [(2014(平成26)年9月6日(土))] 発表者：森 光巧悟 氏

テキスト：上田吉一(著)『人間性の最高価値』 誠信書房 1973

第1部 第1章 人間主義的生物学 心身の相互関係 (p.12 - 18)

〈本文の概要〉

主観的な精神生活と客観的な外的指標をつなげる神経系統の研究がある。例えば脳にある快感中枢の刺激を好む白ネズミの実験をしたオールズの研究、アルファ波を特別なレベルに合わせることで被験者に落ち着きや瞑想や幸福感も生み出せさることを発見したカミヤの研究である。これらの研究から健康な有機体が自ら好み、望ましい事態と考えることについて、はっきりとした大きな信号が出ることは明らかになった。これを「価値」とするには大きな飛躍かもしれないが研究に値する。しかし、健康な人と病的な人とは違った選択をすることがあり、健康な動物は良い見本を選ぶという「循環性」にはジレンマがあり、病的な人の快感はオールズやカミヤの実験に示されているのとは違っている。

ところで、人間主義心理学では、人間は病気や苦痛を求めるよりも、もっと人間らしくありたいと望むものだと考える。道教的立場という原点に帰るものともいえる。道教的というのは教えるよりも尋ねることであり、子どもの成長と自己実現についてもその衝動をもっと強く信頼することを意味するものである。

〈話 題〉

(1) 森氏は、中野信子著『脳内麻薬』(幻冬舎)から、1 に述べられた内容とは異なる観点からの薬物中毒の恐ろしさが紹介した。

遠い将来のことを見据えて作物を育てたり、家を建てたり、さらには村や国を作ったり、ついには何の役に立つかわからない科学や芸術といったことに懸命に力を注ぐような生物ヒトである。この時おそらく快樂物質(ドーパミン)が分泌されている。しかし、一つ間違えると努力せずにはいい結果だけを求めようとする。これが依存症や薬物中毒である。

さらにドーパミンの働きとして、1 で紹介した生理的報酬のほかに、他人から褒められたり良い評判を得たりするとき感じる社会的報酬がある。報酬としてお金を得たときと褒められた時の脳の状態は全く同じ脳の部分が反応する。だから、脳科学的にみると、お金で愛情が買え、逆に愛情をお金に換えることができる。

(2) 森氏は中野氏の内容をマスローの欲求段階説に対応させ、報酬系の働きのうち、生理的報酬はマスローの「生理的欲求」、金銭的報酬は「安全の欲求」、社会的報酬は「所属と愛情の欲求」及び「承認(尊重)の欲求」に相応するだろう。そして、ヒトの全ての欲求は自己実現のためにある。しかしヒトがこれを目指すようにプロパムされた存在なら、そこにも報酬系が間違いなく働いているはずだ。しかし、職科学ではこれはまだ証明されていない、と結んだ。

森氏は気づきとして、生理的報酬の中に「社会的報酬」を潜り込ませることで、快樂の幅が広がり、物質的快樂から、精神の快樂の存在を挙げ、人は目標があって進むのではなく、進むために目標をつくるのだ、と付言した。

※ 次回から上田吉一著『精神的に健康な人間』を読むことになりました。